

キリスト教とイスラーム間の宗教間対話

——霊的道の役割——

リアナ・トルファシュ(前筑波大学教授、筑波大学非常勤講師)

序文

近年の原理主義的運動の激化と、相次ぐ劇的な事件の結果として、宗教間対立の回避とよりよき相互理解への到達を呼び求める声は高まっており、キリスト教とイスラームの宗教間の建設的対話の必要性は、ますます喫緊のものになってきている。

普及している考えとは反対に、現在のキリスト教とイスラーム間の緊張は純粋に宗教的理由に由来するものではなく、いわゆる「文明の衝突」から来るものでもない。この緊張の主要な源泉の一つは、ありとあらゆる宗教を保持している人々の多くが明らかに墮落しているように見えるような西洋文化に対する反感に加えて、アラブ人や他のムスリムの不満にはまた別の根拠がある。それは、二十世紀の初頭以来、イスラーム世界の大部分がいくつかの重大な不正を受け、その不正を西洋の大多数の人々は気づいてさえいないということである。この認識不足こそが、ムスリム世界の至るところで起こっている痛みと苦しみの主要な原因をなしている。

これこそが、宗教間対立を回避し、われわれの社会を悩ませている各種の原理主義運動によって引き起こされた傷を癒すのが容易なことではないことの理由である。アカデミックな研究というわれわれの立脚点からすれば、われわれに可能なことは、真実で実りある宗教間対話を達成するプロセスに貢献することのみであるように思われる。すでに多くのアプローチがとられてきたが、それらは解決策を模索する努力をしているという点ですべて価値があるものであり、そして今後他のいろいろなアプローチも登場していくことであろう。

本発表は、「宗教多様性」という概念に基づいた宗教間対話へのアプローチの提案を目的とする。その内容は下記のように区分される。

1. キリスト教とイスラームの基本的テキストにおける宗教多様性の立場の検討。
2. ジョン・ヒックとS・H・ナスルによる、宗教哲学における宗教多様性の二つのアプローチの検討。
3. キリスト教とイスラームの霊的道、すなわち宗教多様性へむけたよりよい態度へ導く手段の検討。

先に進む前に、いくつかの概念を明確にする必要がある。

いかなる宗教も、自らが真理を伝達し、かつ救済の手段を提供するものであるという、二重の主張を行う。真理と救済の手段が宗教の決定的特性となる。もしそうでなければ、それは宗教ではなく、人工のイデオロギーである。

諸宗教の二重の主張を考察する上で、現代の宗教研究において宗教多様性に対して三つの立場あるいは態度が浮かび上がって来ている。すなわち、多元主義、排他主義、包括主義の三つである。これらは、大まかに言って次のような特徴を持つ。多元主義者は、諸宗教は等しく救済への道を提供していると主張する。一方で排他主義者は、自分自身の宗教のみが真の救済への道を提供すると主張する。また包括主義者は、救済は他の宗教においてもある程度可能であるが、自分自身がもつ宗教が救済のもっとも高度な形式であると考え。しかし、どの立場もさまざまなタイプを持ち、そのタイプは個別の立場をとる理由に関してははっきりと異なったものでありうる。

「宗教多様性」あるいは多様な諸宗教の共存という概念は、それ自体では中立的なものである。重要なのは、多様性あるいは「他者」に対する態度である。他者の主張は受け入れられるか拒絶されるかである。以上の分類によって、理由は異なるものの、「多元主義」と「包括主義」は他者の主張を受け入れる。対して「排他主義」はそれを拒絶するということになる。

1. キリスト教とイスラームの基本的テキストにおける宗教多様性への立場

A. 他宗教に関するキリスト教の立場

(1) 多元主義的に解釈できる言明

1. 神は人を分け隔てなさないことが、よく分かりました。どんな国の人でも、神を畏れて正しいことを行う人は、神に受け入れられるのです。(ペトロ、使徒言行録 10:34-35)
2. 神は過ぎ去った時代には、すべての国の人が思い思いの道を行くままにしておかれました。(パウロ、使徒言行録 14:16)
3. [アテネの人々は、『知られざる神』を探求している]、[この]神はわたしたち一人一人から遠く離れてはおられません。(パウロ、使徒言行録 17:23; 17:27-28)
4. わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。(ヨハネ 14:2)

(2) 排他主義的に解釈された言明

1. わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。(ヨハネ 14:6)
2. わたしは門である。わたしを通して入る者は救われる。(ヨハネ 10:9)
3. 父のほかには子を知る者はなく、子と、子が示そうと思う者のほかには、父を知る者はいません。(マタイ 11:27)
4. [イエス・キリストの名の]ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの[イエス・キリストの]名のほか、人間には与えられていないのです。(ペトロ、使徒言行録 4:12)

これらの最後の言明(2)が非排他主義的解釈を可能にするという事実(下記参照)にもかかわらず、それらはずっと文字通りに理解されてきた。教会はこの排他主義的態度を、「教会の外に救いなし」(*extra ecclesiam nulla salus*) (三世紀のカルタゴの聖キプリアヌス)という有名な声明のうちに要約した。この声明はカトリック教会の中心的教義となった。そして多元主義的解釈の可能性があった言明(1)という貧弱な成果すら決して本の意味で展開されなかった。もちろん、原始教会において、多元主義的意味で理解されうるささやかな註釈が幾人かの教父たちによって行われた。しかし、不幸なことに、その同じ時代から現代まで、キリスト教神学は排他主義によって支配されていた。救済されるべき者はすべてキリスト教徒でなければならない。

この主題に関して権威ある他の証言を見てみよう。

1. 人は思い違いをしてはならない。この家の外、つまり教会の外では誰も救われない。(オリゲネス、没 254 年)
2. 誰もカトリック教会の外には救いを見出すことはできない。カトリック教会の外に、人はすべてのものを見出すことができるだろうが、救済を得られることはない。(聖アウグスティヌス、没 430 年)
3. 教会の外では救済への参入は存在しない。(トマス・アキナス、没 1274 年)
4. キリスト教の外にいる者、すなわち異教徒、トルコ人、ユダヤ人あるいは偽キリスト教徒は、唯一の真なる神を信じている場合も、それでも永遠の神罰と地獄にとどまる。(ルター、没 1546 年)
5. それゆえわれわれは、創造の理由において神に属するすべての非キリスト教徒たちに、彼(イエス・キリスト)を信じ、彼の名において洗礼を受けることを促す。というのも彼が約束された永遠の救済は、彼においてのみ得られるからである。(カトリック教会のフランクフルト宣言、1970 年)

以上の引用により、神学の場合に宗教間の真の対話に達するためには、キリスト教会はキリスト教のみが唯一の真なる宗教であり、救済はキリスト教徒の特権であるという主張を放棄しなければならないことは明らかである。

B. 他宗教に関するイスラームの立場——クルアーン——

(1) 多元主義に関する言明

(a) 神の啓示の普遍性と多様性

1. 「東も西も神のもの。おまえたちがどこに向きを変えても、そこに神のお顔がある。」(2:15)
2. 「われらは、今までにも民族ごとに、神を拝しアッ・ターグートを避けよとて、使徒を遣わした。」(16:36)
3. 「われらは、汝より以前にも使徒たちを遣わした。その一部については、すでに汝に話してやった。また一部は、まだ話していない。」(40:78)
4. 「おまえたちは言うがよい。「われわれは神を信じ、そしてわれわれに啓示されたものを、アブラハムとイシマエルとヤコブともろもろの支族に啓示されたものを、モーセとイエスに与えられたものを信ずる。また、もろもろの預言者が主から与えられたものを信ずる。われわれはこれらの間で、だれかれの差別はしない。われわれは神に帰依する。」(2:136)
5. 「われらが使徒を遣わすときは、かならずその民族のことばを用いさせた。それは彼らによく理解させるためである。」(14:4)
6. 「われらは以前に下された聖典を確認し、またそれを保護するため、真理をもって汝に啓典を下した。……われわれはおまえたちそれぞれのために、法と道とを設けた。もし神が欲したもうたならば、おまえたちを単一の民となしたもうたであろうに。……おまえたちすべてが帰るところは神のみもとである。そうなったとき神は、おまえたちが論争していた点について教えたもうであろう。」(5:48)

以上の引用により、イスラームは明確に神の啓示の普遍性を支持しているとみなすことができる。クルアーンの神はムスリムの神であるだけでなく、全人類の神でもある。神はいかなる民族も暗闇のうちにとどまらせてはおかない。神は、すべての人々の救いを確証するために、すべての民族に使徒を送る。神はあらゆる民族に使徒を送ったのだが、クルアーンのなかでその使徒のすべてに言及したわけではなかった。それゆえ、ムスリムは、ブッダやヒンドゥーの神の表れであるとされているような、クルアーンで言及されていない使徒をも包摂するために、イスラームの預言についての概念を拡張することに対してクルアーンによる認可を受けている。そして、すべての使徒は同じ実在について語り、同じ真理を伝達するにもかかわらず、使徒たちが伝えるメッセージは形式において同一ではない。どのメッセージも、それが啓示される共同体に従った言語と形式で表現されるのである。(Aslan, 188 参照)

(b) 強制してはならず、寛容でなければならない。

1. 「言ってやれ、「真理は主から来た。欲する者は信ぜよ。欲する者は信ずるな。」(18:29)
2. 「もし汝の主のみ心なら、地上にあるすべての者は、いっせいに信仰にはいったことであろう。それに、汝は人々にむり強いしたあげく、信者にしようとするのか。」(10:99)
3. 「言ってやれ、「啓典の民よ、われわれとおまえたちのあいだになんの差別もないみことばのところに来るがよい。われわれは神以外の者を崇めることなく、なにものをも神に併置することなく、また神をさしおいて、おたがい同士を主と呼ぶこともないからである。」(3:64)
4. 「まことに神は、信ずる人々を防衛したもう。……すなわち、これらはただ、「われわれの主は神です」と言うだけで、不当にも故郷を追われた人々のこと。もし神が人々をしてたがいに牽制せしめたまわなかったならば、修道院も教会も会堂も、神の御名が頻繁に唱えられる礼拝堂も、すべて破壊されただろうに。神はご自身を助ける者を助けたもう。」(22: 38; 40)
5. 「それゆえ、福音書の民は、神がその中に啓示したもうたものによって裁くべきである。」(5: 47)

6. 「そして言え、「われわれは、われわれに下されたもの、あなたの方の下されたもの、いずれをも信仰する。われわれの神はあなたがたの神と同一である。われわれは神の帰依者である」。(29:46)

(c) 救済を受けるために必要なこと

1. 「まことに、信仰ある人々、ユダヤ教の信者、キリスト教徒、それにサビア人など、神と終末の日とを信じ、善を行う者は、その主のみもとに報酬がある。彼らには恐れもなく、また悲しむこともない。」(2:62)
2. 「男でも女でも、信じて善を行う者には、われらはよき生涯を送らせ、その行った最善のものに応じて報酬を与えてやる。」(16:97)

(2) 排他主義的および包括主義的に解釈可能な言明

1. The [true] religion with Allah is Islam. (3:19)
2. Whoever seeks a religion other than Islam, it will never be accepted from him, and in the Hereafter he will be one of the losers. (3:85)

(*The Quran. A Modern English Version*, translated by Majid Fakhry, Garnet Publishing 1997)

上記の二つの句は、それぞれクルアーンの中で排他主義的立場をとっているように見える——「「アッラーにとって唯一、真の宗教がイスラームである」(“For Allah the only true religion is Islam”)」——、数少ない句である。しかし、これらは曖昧なものであり、排他主義的解釈と同時に多元主義的解釈にも開かれている。両句の解釈に関してはアラビア語の「アッラー」(*Allāh*)という言葉の翻訳の問題もある。「アッラー」とは「イスラームの神」の意味を持つ固有名詞ではなく、単に「神」を指す普通名詞である。しかし、この曖昧さは、とりわけ「イスラーム」(*islām*)という言葉それ自体の意味に由来する。この言葉は一つの宗教に与えられた名であるだけでなく、神の意志に完全に従う行為の名でもある。この意味において、すべての啓示された宗教は「イスラーム」と呼ばれうる。そして神の意志に従ういかなる者も「ムスリム」と呼ばれうる(クルアーン 3:67; 2:128; 3:83)。

それゆえ、上記の二つの句は、実際多元主義的意味に翻訳されることもできる。

1. True Religion, in God's eyes, is *islām* [complete devotion to Him alone]. (3:19)
2. If anyone seeks a religion other than complete devotion to God [*islām*], it will not be accepted from him: he will be one of the losers in the Hereafter. (3:85)

(*The Qur'an, A new translation*, by M.A.S. Abdel Haleem, Oxford University Press, 2010)

この点に関して、クルアーンの日本語訳においては、次の二つの立場がある。井筒俊彦訳(岩波書店、1957 年)では、*Allāh* は「アッラー」と固有名で、*islām* は「神の意志への絶対帰依」と訳され、藤本勝次・判康成・池田修による訳(中央公論新社、2002 年)では、*islām* は「イスラーム」、*Allāh* は「神」と一般名詞として訳されている。

1. 「アッラーよりすれば、真の宗教はただ一つイスラーム(神に対する絶対無条件的服従を意味する)あるのみ。」(3:17)
2. 「絶対帰依以外のものを宗教をしたいと思うような奴は、(後になって何と言おうと)全然受け^い納れては戴けまいぜ。」(3:79)『コーラン上』井筒俊彦訳 岩波書店 1957 年)
1. 「神のみもとの宗教こそイスラムである。」(3:19)
2. 「イスラム以外の宗教を求める者は、何一つ受け入れていただけない。そのような者は来世で損をするだけ。」(3:85)『コーラン I』藤本勝次・伴康哉・池田修訳 中央公論新社 2002 年)

また、包括主義的に解釈可能なコーランの句も存在する。ムハンマドが「預言者たちのしるし」と呼ばれている句である。

ムハンマドは、神の使徒であり、最後の預言者である。(33:40)

これは一般的に、ムハンマドはアダムに始まる現在の人類の周期において神から遣わされた最後の神的使徒あるいは預言者である、という意味で理解されている。しかしまた次のように理解されることもある。それは、ムハンマドは、以前のすべての預言者によって所持されたすべての完成を自らのうちに達成したのであり、その結果として、彼が受け取った神からの啓示、すなわちクルアーンは他のすべての啓示を総合的に集めた統一体である、というものである。この解釈により示される包括主義的立場は、イスラームの歴史全体を通して若干のムスリムの学者によって採用された。しかし、以前に啓示された宗教の無効を明示的に宣言するいかなる句もクルアーンのなかには存在しないように思われる。それどころか、それらすべてを認める(5:48)。

他方で、クルアーンのなかにはユダヤ人やキリスト教徒が批判される多くの句も存在する。しかしこのような事例において、批判されているのは宗教としてのユダヤ教やキリスト教ではなく、個人である。したがって、排他主義的立場を「証明」する句は与えられていないと言える。

本章を以下のように要約できる。

1. キリスト教とイスラームの間の宗教間対話のためには、いかなる場とレベルにおいても、自らの宗教の基本的テキストにおいて表されている宗教多様性に関する教えや主張について知ることが、前提として不可欠である。
2. 宗教多様性に関する公的なキリスト教の立場が修正されないかぎり、キリスト教とイスラームの間の宗教間対話は、少なくとも神学的な場においてほとんど不可能であるように思われる。明らかに、キリスト教以外のすべての宗教が偽であり、それらは自分たちの最高の完全性であると主張していることは空想に過ぎないという考えが潜んでいる限り、このような対話は決して真の意味を持つことはできないだろう。

2. 宗教哲学における宗教多様性への二つのアプローチ——ジョン・ヒックと S・H・ナスル

よりよい宗教間対話のために、宗教哲学はどのような解決策をわれわれに示してくれるのだろうか。

最近の数十年において提案された解決策のなかでは、ジョン・ヒックの「宗教多元主義」の理論と、サイード・フセイン・ナスルの「伝統主義的アプローチ」が、もっとも代表的なものであると考える。

A. ヒックの宗教多元主義の理論

ヒックの宗教多元主義の理論のもっとも重要な特徴は、次のように要約される。

ヒックは、諸宗教(概して彼は、ユダヤ教・キリスト教・イスラーム・ヒンドゥー教・仏教といった、現存している主要な伝統のみを考慮している)の排他主義的要求は修正されなければならない、と主張する。いかなる排他主義的要求——とくにキリスト教のそれ——も、普遍的救済という概念と、宗教的多様性への多元主義的で融和的なアプローチのための必要な前提と、齟齬を来すものである。

キリスト教徒としての私たちの言い分は次のようなものである。すなわち、神とは普遍的な愛の神であり、……万人の究極の善ならびに救済を望む神である。しかしまた、私たちの伝統的な言い回しによると、救済へと通じる唯一の道はキリスト教である。しかし私たちは、今日までに生を享け死んでいった人類の大多数がキリスト教以前の時代か、あるいはキリスト教という枠線の外側で生きてきたということを知っている。だから、全人類の救済を目指す愛の神は結局のところ、ごく少数の人々だけが実際にそのような救済を得られるよう定めたのであった——こんな結論を、果たして私たちは受け入れることができるだろうか。(Hick, *Disputed Questions*, 172.)

包括主義も問題を解決しない。ヒックによれば、唯一の解決策は、神学における「コペルニクスの転回」のみである。この概念はなにを意味しているのだろうか。ヒックは以下のように言う。

神学に必要なコペルニクスの転回の内実とは、信仰という宇宙および、その宇宙内で自らの宗教が占める位置づけについての私たちの考え方に関する変容を、天文学の場合と同程度にラディカルな意識変容を必要とするのである。それは、キリスト教こそが中心であるとの教理から、世界の中心にいるのは神であり、人類のあらゆる宗教は——私たち自身のものも含めて——神に仕え、その周りを運行しているのだと悟ることを必要とするのである。(Hick, *God and the Universe*, 130-131.)

これは印象的で、かつ説得力のある言葉ではあるが、「信仰という宇宙についての私たちの考え方に関するラディカルな意識変容」とはどのように理解されるべきであるのか、われわれに示してくれない。加えて、「必要なコペルニクスの転回」はどのようにして起こすことができるのかも説明しない。これらの点を理解するためには、宗教に関するヒックの立場についていくつか述べる必要がある。まさしくこの立場が、彼の宗教多元主義の理論全体の基礎になっているからである。

ヒックによれば、宗教は神的な啓示ではなく、主として超越的なものあるいは「実在」への人間の応答である。宗教はたとえ純粋な「実在との邂逅」の結果、あるいは「宗教的経験」の結果として考えられたとしても、それは人工的な構築物であることに変わりはない。このことは、諸宗教の真理主張と教義は、その本質において主観的であるということの意味する。人工物であるとされると、それらの主張と教義はラディカルな修正を多かれ少なかれ受けうる。言い換えれば、各宗教の真理主張は神の実在(神、絶対者、一者、究極的なもの、等々、その宗教の伝統に従うもの)に由来するのではなく、各々の自己規定によるのである。したがって、それら主張や教義は変化の余地がある。それらは修正されうるし、必要ならば修正されなければならない。

ヒックの宗教概念についての理解と、彼の宗教多様性の問題の解決に達したいという誠実な望みの両方に基づいているこの結論こそ、彼をして神学における「コペルニクスの転回」を提案させるよう導いた。彼にとって「転回」とは、われわれの時代の神学者は、排他的主張から始まったそれぞれの宗教のいくつかの真理主張と教義を修正するか、場合によっては拒絶しなければならない、ということの意味している。そうすることによって、諸宗教は、ヒックが言うところの「グローバル神学」、言い換えれば人間によって造られた「グローバル宗教」あるいは「超・宗教」へと至る道を準備する。この観点に立つてヒックは次のように述べる。

我々は、グローバルなあるいは人間的な神学を形成するという長期的な課題に取りかかることによって、この新たな〔世界の〕状況に応答することが出来るように備えなければならないのである。グローバルな神学が、宗教的生の具体的な諸形態としての諸宗教が継続的に存在することと両立するものであるだろうということは、注意しておくべきであろう。(Hick, *God and the Universe*, 103.)

言い換えれば、諸宗教間の調和的な相互受容と相互理解に達するための解決策は、すべての伝統的宗教にとつてかわり、すべての宗教に適していて受け入れ可能な「グローバル神学」であるとヒックは考えている。

彼によれば、各宗教が他の宗教と対立し争い合わせる教義の修正あるいは放棄することにより、諸宗教間の境界線が撤廃されるならば、この種の「グローバル宗教」は実現可能である。問題は、そのような「グローバル宗教」と現存の宗教とは、彼が主張するように両立可能であるかどうか、ということである。例を挙げれば、彼はキリスト教神学に、受肉、イエスの神的起源、三位一体の教義を放棄するよう求めている。しかし、神学的権威のみならず普通の人々によっても、この提案が支持されることはまったくありえそうにない。とはいえ、もし宗教間対話が本当に必要であるのであれば、それは神学的領域よりもむしろ一般の人々のレベルにおいてであろう。

筆者の考えでは、現実感覚のある解決策というものは、根本的教義を放棄するよう求めるものであってはならない。それが神的に啓示されたとみなされているのならばなおさらである。むしろ、非・排他主義的意味において教義を解釈するよう求めるのみであるべきである。

結論としては、さまざまな宗教間の対立を除去せんと試みたという点では意義深いものであるにもかかわらず、ヒックのまったく個人的でむしろユートピア的な宗教多元主義の理論は徒労に終わるように思われる。

B. ナスルの伝統主義的アプローチ

ヒックとは違い、ナスルの宗教多様性への伝統主義的アプローチは、個人的理論というよりは、むしろ彼が「伝統主義的思想学派」と呼ぶものの個人的表現である。この理由のために、以下手短に、この学派の宗教多様性にもっとも関連がある特徴を記述する。

1. すべての伝統的宗教は神的に啓示された。したがって、真理主張(排他的に解釈可能ではあるが、そのように解釈されるべきではない真理主張)も含めたその根本的教義は、聖なるものとして尊重されなければならない。問題は、それらの主張はそれぞれ正しく解釈される必要があるということである。

2. 「相対的絶対」の概念。この概念は、「神的実在」あるいは「絶対者」それ自体のみが「絶対的」であり、その下にあるもの、「神的なもの」あるいは「聖なるもの」だと見なされているものはすべて、「相対的に絶対的」である、ということの意味する。

3. 「諸宗教の超越的統一(あるいは一致)」の原理。この原理によれば、各々の偉大な啓示、あるいは伝統的宗教——それらに対応する崇拝の仕方を含めて——は、「神的実在」の、空間と時間における人類の一部に対する固有の顕現、あるいは「神意の覆い」である。諸宗教の統一(一致)は、それらが様々な現れであるところの「神的実在」においてのみ達成されるのである。

まさしくそれが超越的であるがゆえに、この統一はいかなる伝統的宗教をも拒絶しない。このことを表すよう、伝統思想における書においてはしばしば登山の比喻が使用されている。

登山者たちは、山のふもとと異なった地点から出発することができる。それらの地点から、登山者たちは頂上へと至る個別の道を進まなければならない。人はすべての道の有効性を信じることができるだろうし、また信じなければならないが、しかし彼は二つの異なった道を同時に進むことはできない。最終的に、すべての道は頂点で出会うが、しかしそれが起こるのは頂点においてのみである。同様に、諸宗教も「出会い」、統一に達するのだが、それは超越的な「神的実在」においてのみである。(William Stoddart, 68 参照)

ナスルに戻れば、彼の宗教多様性の問題へのアプローチは、上記の点の明確な説明を通じた展開にあると言える。彼にとって、真の宗教間対話に達するために、われわれがまずやらなければならないことは、啓示された伝統的な宗教の教義を正しく理解し解釈することであり、それによってその教義を改変あるいは無効化することなく受け入れることである。

その最適な例は、キリスト教の排外主義的立場を最も生み出した言明の例である。「わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」(ヨハネ14:6)。ナスルによれば、この言葉はキリスト教の特殊性を強調しているのではなく、キリストがのぞむ共同体のための媒介者としてのキリストの役割を強調しているのである。それは、もし誰かが他のいかなる道を探し、キリストの媒介を受けずに自身の努力でもって神に至ろうと試みるならば、このような人は目標に到達することはできない、ということの意味している。言い換えれば、このような警告は、他の宗教の真正性を否定することが問題であったのではなく、ある人の救済への道のりにおける神の助けの必要性を表現し、またこの助けなくして

神に達しようとする人の努力の不可能性を表現しているのである。必要な変形を加えれば、同じ解釈は、他の伝統的宗教においてこのような「排他的」言語が使われている場合にも当てはまる。(Aslan, 207; 107 参照)

「相対的絶対」の概念は、多元主義的アプローチの助けとなりうるとナスルは考える。例えば、イスラームの場合ではクルアーン、キリスト教の場合ではイエスは絶対者それ自体ではないにもかかわらず、「絶対的」とみなされる。あるキリスト教徒が歴史的イエスを神と見なし、この見解を絶対的意味において保持することは、宗教の観点から見れば完全に理解可能なことであるが、対して形而上学的にはそれは「相対的絶対」である。というのも、「神的實在」それ自体はすべての相対性を越えているからである。(Aslan, 165 参照)

ナスルによれば、宗教多元主義の問題を解決する方法は、すべての伝統的宗教による、すべての宗教の「本質的統一性」の相互承認である。諸宗教はこの「多様性における統一」によって自らの同一性と特殊性を保持する。しかし彼は、この諸宗教の統一は諸宗教の歴史的レベルで見出すことはできないと強調する。それは諸宗教の外的な表し方を越えているのである。ヒックの「地上でのグローバル宗教」と違い、それは「天における諸宗教の超越的統一」である。彼は次のように述べる。

諸宗教の一致はまず何もまして、同時に《真理》や《實在性》、また諸啓示やあらゆる真理の根源である《絶対者》の内に見出される。……諸宗教の教えは、《絶対者》のレベルにおいてのみ同一のものである。それよりも下のレベルにおいては、最も深い対応関係はあるものの、同一性は存在しない。様々に異なった諸宗教は、それ自身の内なる原型的可能性に従い、様々な〔宗教的〕世界の中に自らを顕現するあの唯一の《真理》について語る様々な言語のようなものである。しかし、それら諸言語の統語法は同一のものではない。とはいえ、いずれの宗教も《真理》から出ているのであるから、それぞれの宗教において啓示されたあらゆるものは神聖であり、したがって敬われ大事にされるべきなのである。また他方で、それらは、ある種の抽象的普遍性の名において切り捨てられたり、無意味なものへと還元されてしまったりするよりも、むしろ解明されるべきものである。(Nasr, *Knowledge*, 293.)

諸宗教の統一は超越的でなければ不可能であるということを示すために、ナスルはしばしばイブン・アラビー(1165-1240)とルーミー(1207-1273)という、二つの偉大なスーフィーの詩句を引用する。

私の心はいかなる形態をもとりうるものとなった。私の心は、ガゼルのための牧草、キリスト教修道士のための修道院、偶像のための神殿と巡礼者のカアバ、トラーの石板とクルアーンの手帳。私は愛の宗教に従う。愛の駱駝がいかなる道を行こうとも、それが私の宗教、私の信仰。

(Ibn 'Arabī, *Tarjumān al-Ashwāq* XI, 13-15, translated by R. A. Nicholson, 67.)

私はキリスト教徒でもユダヤ教徒でもパールシー教徒でもイスラム教徒でもない。私は東の者でも西の者でもなければ、陸の者でも海の者でもない。……私は二元性を脇に置き、二つの世界が一つであるのを見た。私は「一」を追い求める。私は「一」を知る。私は「一」を見る。私は「一」に呼びかける。彼は最初の者、彼は最後の者、彼は外なる者、彼は内なる者。

(Rūmī, *Selected Poems from the Divānī Shamsī Tabrīz*, Edited and translated by R. A. Nicholson, 125-127.)

被造物の間の差異は外的な形に由来する。人が内なる意味を理解したとき、そこには平和がある。おお、存在の精髓よ！イスラム教徒、ゾロアスター教徒、ユダヤ教徒の間に差異が生ずるようになったのは、観点の違いのためである。

(Rūmī, quoted in Seyyed Hossein Nasr, *Sufi Essays*, 123.)

これに対して、筆者は偉大だがほとんど知られていないトルコのスーフィー詩人、ユヌス・エムレ(?- 1320 頃)の詩句を加えたい。

われわれは実現化の家に入った、われわれは身体を目撃した。

旋回する天空を、何層もが重なり合った地を、七万枚のヴェールを、われわれは身体の中に発見した。

夜に昼、惑星たち、聖なる板に刻まれた言葉、モーゼがよじ登ったあの丘、あの〔ユダヤ教の〕神殿、イスラフィーールのトランペット、われわれは身体の中に見聞きた。

トラー、詩編、福音書、コーラン——、これらの書が語るべきことを、われわれは身体の中に発見した。

(*The Drop that Became the Sea, Lyric Poems of Yunus Emre*, translated from Turkish by K. Helminsky and R. Algan, 20.)

疑いなく、これらの詩句はナスルの「諸宗教の超越的統一」の解釈を支持している。諸宗教は「一者を知ること」によって、神において自らの「内的意味」を知ることによってのみ、「霊的実現」の頂上において「出会う」のである。

しかしながら、このような深い神秘体験から来る言明の問題は、人々は神秘的言語に慣れておらず、大部分の人々はこのような言明を二つの極端な形で受け取ってしまう恐れがあることである。それは、人々はよくても何も理解できないだろうし、最悪の場合それを冒涇と考えてしまうかもしれない、というものである。それゆえ、このような言明について知ることは、普通の人々という、宗教間対話をもっとも必要とされている場のために大いに役立つというわけにはいかないように思われる。

このことは、なぜナスルの伝統主義的アプローチが、理論的、アカデミックなレベルに限られるにとどまる見込みが強いのかの理由である。「諸宗教の超越的統一」のような複雑な哲学的概念や難解な神秘思想における言語を理解できる人は、実際まれなのである。

にもかかわらず、伝統主義的アプローチそれ自体は宗教的多様性の問題の解決策になりうると考える。それは敬虔な信者を憤慨させることなく、諸宗教の多様性を調停することができる。すべての宗教を、同じ頂点へと至る異なる道とみなすことによって、宗教的寛容を強調することができる。同様に、個別の諸価値を斥けることなく、多文化的・多宗教的共同体を作りあげられるような枠組みを構築することもできる。

ただ一つ言えば、よりよき現実的な解決策となるために、伝統主義的アプローチの立場は、諸宗教の、特にそのさまざまな霊的道の倫理的、道徳的側面により広い位置を与えることで、拡大されなければならないだろう。

3. キリスト教とイスラームにおける霊的道——宗教多様性に対するよりよき態度へ導く手段

筆者は、キリスト教とイスラームの霊的道についての相互的な認識が、宗教間対話を現実強化に強化することができると思う。ここで考えられているのは、かかる霊的道の形而上学のおよび神秘体験に基づく高度な表現ではない。アカデミックな世界の雲ではなく、広範囲の普通の人々の間でよりよき宗教間対話に達することを求める場合、教義について、またイブン・アラビーやエックハルトの神秘体験から湧き出るような神秘的表現についてのよりよい知識を得ることはあまり役に立たないだろう。

幸い、霊的道においては違った側面もある。ここで私が考えているのは何よりも倫理的、道徳的側面である。多くの人々に深く直接的なインパクトを与えているのはこのような側面である。なぜなら、キリスト教的あるいはイスラーム的である以前に、倫理的な、道徳的な原理はまず人間的なものであるからである。これに加えて、かかる原理は特に美しく印象的な表現を身に纏っている。これこそ、なぜこのような表現の知識が真に望まれる宗教間対話へと導く現実の手段になれるのかと、筆者が考える所以である。

この主張を実証するために、以下でキリスト教とイスラーム両方から、霊的道に属するいくつかのテキストを引用する。引用は長くなるが、これらのテキストは、いかなるコメントよりも雄弁に語ってくれるであろう。

A. キリスト教

(1) 『砂漠の師父の言葉』

1. アガトンは語った。「わたしは、未だかつて、誰かに対して反発を抱いたままで床に就いたことはない。またできる限り、人がわたしに対して反感を抱いたままで、床に就くことがないようにした。」
 2. 師父アガトンは、弟子たちと歩いていた。その中の一人が、熟していない小さな豆を道で見つけ、長老に言った。「父よ、これを拾いましょうか。」すると、長老は驚いて彼をじっと見つめ、言った。「それをそこに置いたのは、そなたなのか。」兄弟が、「いいえ」と答えると、長老は言った。「そなたが置かなかったものを、なぜ拾おうとするのか。」
 3. 師父アンモナスは語った。「わたしは、怒りに打ち勝つことができるように、日夜神に懇願しながら、スケーティスで一四年間を過ごした。」
 4. 師父ヨハネ・コロボスは語った。「軽んじられても怒らず、平安を保ち、悪に対して悪で報いてはならない。また、他人の過ちを気にせず、自分を高く評価することなく、すべての被造物の下に置くがよい。」
 5. 師父マカリオスは語った。「あなたの中で軽蔑が賞讃となり、貧困が豊かさとなり、不足が豊富さになったならば、あなたは死ぬことはないだろう。」
 6. 師父マカリオスは語った。「誰にも悪をなさず、誰をも裁いてはならない。これを守れ。そうすれば救われよう。」
 7. 師父モーセは言った。「誰にも悪しきことを行ってはならず、誰に対しても悪い考えを心に抱いてはならない。……他人を中傷してはならず、むしろ神がそれぞれの者を知っている、と言うがよい。」
 8. クサンティアスは語った。「犬はわたしよりも優れている。というのも、犬には愛があり、裁きに至らないからである。」
- (『砂漠の師父の言葉』)

(2) シリアのイサク(7世紀)

言葉

1. 誰かを中傷しようと口を開く日には、あなたは神の前で死んだと、全ての努力が無駄になったと考えろ。
2. 迫害する者になるより迫害される者になれ。
3. たとえ調停者ではないとしても、すくなくとも騒ぎを起こす者にはなるな。
4. 良い生き方が伴っていない祈りは、翼をもがれたワシである。

(*The Wisdom of Saint Isaac the Syrian*)

同情の心——世界への祈り

同情の心とはどういうものですか。それは全被造物のため、人間のため、鳥のため、動物のため、悪霊たちのため、そして、存在するすべてのものために燃える心である。それらを思い起こすごとに、また、それらを見るたびに彼の心を掴む激しい同情のため、そのような人の目には涙が溢れる。彼の深い慈しみの心のゆえに、彼がすべての被造物のうちにあつたような傷、または、ごくわずかな苦しみにでも接する時は、彼の心はそれについて聞いたり、見たりすることを恐れ、それに耐えることができない。そのために、彼は常に、祈りを捧げる時涙に溢れる。残忍な動物や、真理の敵、また彼に危害を加えようとする人々のためにも、彼は、彼らが神に守られ、神の慈悲を受けることができるようにと祈る。

(『同情の心—シリアの聖イサクによる黙想の60日—』 35 頁。)

B. イスラーム

(1) スーフィーの言葉

1. 直観知とは、怒りや敵対心の欠片を、己の中にたった一つも見付けられないことである。(ハサン・バスリー、没728年)
2. 神の友の印は、彼が持つ三つの性質である。大海のような寛大さ、太陽のような思いやり、大地のような謙虚さ。(バスターミー、没875年)
3. 貧困は受けることよりも与えることが大きくなならないかぎり完成しない。(ハッダード、没879年)
4. 人は直感知を得た者にはなり得ない。彼が、正しい者も罪深い者もその上を歩く大地のようになるまでは。すべてのものの上に影を落とす雲のようになるまでは。それを好むか好まざるかに関わらず、すべてのものを潤し濡らす雨のようになるまでは。(ジュナイド、没910年)
5. 誰もスーフィーではない。全人類を自分の家族と考えるまでは。(シブリー、没946年)

(2) スラミー(1021 没) 霊的騎士道(フトゥーフ)

1. あなたの人間関係において、もしあなたが仮に横柄な人物に出会ったとしたら、理解と寛容を示しなさい。そしてもしあなたに害を与える人に出会ったら、寛大さで応えなさい。……いつでも平和と調和の余地を残しておきなさい。
 2. そして、あなたの良い行いを他人に知られるな。良いことは、知られてしまえばもはや良いことではなくなってしまう。
 3. あなたは、言われてからその要求に応えようとしてはならない。そうではなく、事情や兆候からあなたの兄弟の要求を知るべきであり、頼まれる前に助けるべきである。……この(フトゥーフの)道にいと主張する者は誰であれ、[以下の]3つの印を見せなければならない。恐怖のない完全な忠誠心、賞賛へのいかなる欲求あるいは望みもない寛大な心、請われなくとも与えたいと願う心。
 4. 邪があなたから離れるために、邪から離れなさい。
 5. (フトゥーフの)道にある者は、自分の所有物をすべて放棄するが、寛大さは決して放棄しない。彼は請われることなく与える。なぜなら彼は、請うことの苦しみを他人が被ることを望まないのだ。
- 正直であれ。誠実であれ。信頼できる者であれ。寛大であれ。……悪口に耳を傾けるな。善を為すことを望め。良い隣人であれ。立派なことを言い、自分の言葉に誠実であれ。……恨みを持つことや復讐を望むことを慎め。人を欺いたり、操ったりするな。彼らを非難したり、責めたりするな。……感謝や賞賛を期待するな。あなたの手で賓客をもてなしなさい。渋々ではなく、愛を込めてもてなし、与えなさい。他人の誤りには目を瞑りなさい。彼らの過ちは秘密にしておきなさい。そして他の誰にも聞かれていないときに、彼らに助言しなさい。罪人のために祈り、彼らの過ちを許しなさい。……他人の秘密を守りなさい。……これらが、フトゥーフの道に従う者の示すいくつかの印である。(Sulamī, *The Way of Sufi Chivalry*)

多くの感動的な言葉の後に本発表を終えるに当たって、以下の疑問を挙げるが、この疑問が他の多くの人々によっても問われることを期待したい。

1. このような言葉がムスリムとキリスト教徒を、東洋と西洋を、天と地を結びつけることができないだろうか？
2. もし、言われているように、どの樹木もその実によって知られるならば、どうしてそのような素晴らしい実を結ぶ樹木が悪いものであるのだろうか？

参考文献

1. 『聖書新共同訳』日本聖書教会1987年。
2. 『コーラン I』藤本勝次・伴康哉・池田修訳 中央公論新社 2002 年。
3. John HICK, *Disputed questions in theology and the philosophy of religion*, Macmillan, 1993.
4. John HICK, *God and the universe of faiths: essays in the philosophy of religion*, Macmillan, 1973.
5. William STODDART, *What Does Islam Mean in Today's World?*, World Wisdom, 2012.
6. Adnan ASLAN, *Religious Pluralism in Christian and Islamic Philosophy; The Thought of John Hick and Seyyed Hussein Nasr*, Routledge Curzon, 2004, Japan Library, 1994.
7. Seyyed Hossein NASR, *Knowledge and the Sacred*, State University of New York Press, 1989.
8. Ibn 'ARABĪ, *Tarjumān al-Ashwāq* XI, 13-15, translated by R. A. Nicholson, Theosophical Publishing House, 1911.
9. RŪMĪ, *Selected Poems from the Dīvāni Shamsi Tabrīz*, edited and translated by R. A. Nicholson, Curzon, 1898, 1999.
10. RŪMĪ, quoted in Seyyed Hossein Nasr, *Sufi Essays*, ABC International, 1999.
11. Yunus EMRE, *The Drop that Became the Sea, Lyric Poems of Yunus Emre*, translated from Turkish by K. Helminsky and R. Algan, Boston & London: Threshold Books, 2000.
12. 『砂漠の師父の言葉』 谷隆一郎・岩倉さやか訳 知線書館 2004 年。
13. (シリアのイサク) *The Wisdom of Saint Isaac the Syrian*, translated by Sebastian Brock, England, 1997.
14. 『同情の心――シリアの聖イサクによる黙想の60日――』A・M・オーチン編 S・ブロック英訳 梶原史郎訳 聖公会出版 1990 年。
15. SULAMĪ, *The Way of Sufi Chivalry*, An interpretation by Tosun Bayrak al-Jerrahi, Inner Traditions International, 1983, 1991.

Interfaith Dialogue & “Harmony of Civilizations”



① Christian and Muslim playing *Cantigas de Santa Maria* by King Alfonso X



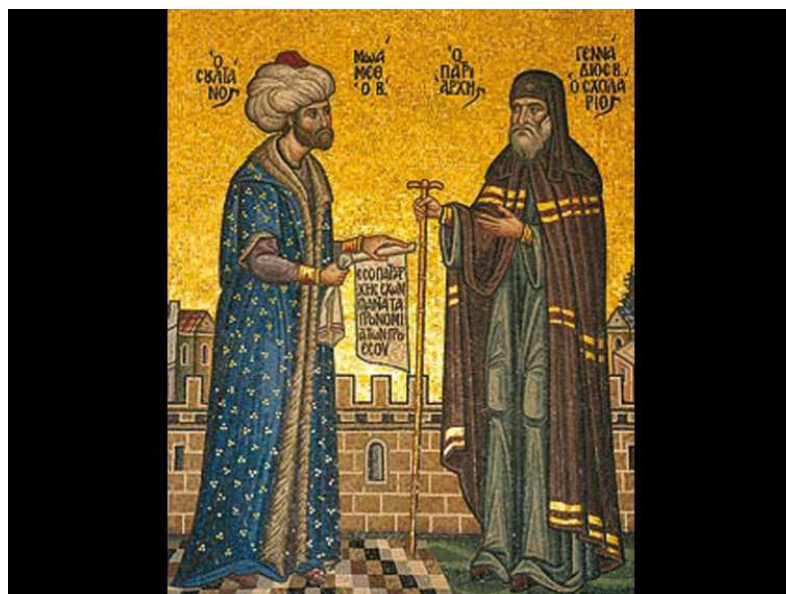
② “Interfaith Dialogue” between Christians, Muslims and Jews in Medieval Spain



③ Christian and Muslim playing Chess



④ Christian and Muslim practicing geometry, 15th century manuscript



⑤ In 1493, Mehmet II “the Conqueror” gives the first privileges to the Orthodox Patriarch, Gennadios Scholarios, saying: “Be Patriarch and have the privileges of those before you.” Mosaic in the Patriarchal Residence in Istanbul.